■特集：公開シンポジウム　－新しい奄美世界の創出(3)－

公開シンポジウム　新しい奄美世界の創出
第２部：シンポジウム（15:30～18:00）
「奄美の自立と産業戦略」
パネリスト：矢田　俊文（元九州大学副学長）
菅沼　俊彦（鹿児島大学）
山門　健一（沖縄大学）
コーディネーター：山田　誠（鹿児島大学）

平井　時間が参りましたから，第２部のシンポジウム「奄美の自立と産業戦略」に入りたいと思います。これから先のコーディネーターは山田先生にお願いいたします。

山田　先ほどご挨拶で申し上げましたように，私どもは１月に名瀬で第一回シンポジウムを開かせていただきました。そのシンポジウムのテーマそのものは非常に明快でありました。賛成するにせよ，反対するにせよ，奄美振興特別措置法というものをどのように今後活用していくのかということをめぐりまして白熱した議論が展開されたわけであります。その成果は，『奄美の開発』という本にまとめさせていただきました。南方新社のほうから出させていただいております。ぜひお買い上げをいただきたいと思っております。前回のシンポジウムと対比して申し上げますと，今日のテーマと講演者の組み合わせは，コーディネーターといたしましては非常に頭を悩ますところで，昨夜は正直ほとんど眠っておりません。どういうふうに私が頭を悩ましてきたかということは，パネラーの先生方をご紹介すれば会場の皆様にもお分かりいただけるかと思います。

お手元のシンポジウムのパンフレットとは少し順序を入れ替えて，こちらの矢田先生の方から紹介します。矢田先生は九州大学の副学長，経済学研究院長を歴任されまして，そして私どもの今日のシンポジウムの関係では，98年から国土審議会委員をなさっておられます。５全総，第５次全国総合開発計画策定専門委員会委員長代理という重責を務めておられます。それで今日は日本の国土設計の中でこの奄美の話，位置づけの問題をご議論いただけると期待しております。その隣が菅沼俊彦，私どもと同じ鹿児島大学の同僚でございますが，農学部で糖質資源というものの専門家でして，サツマイモだとかサトウキビそういうものの糖質の研究をしております。本人は全然アルコールはだめなのでありますが，焼酎の国際学会の事務局長を引き受けたりとか，訳の分からない経歴を持っていまして，今夜飲ませてみたらゆで蛸のように赤くなるはずです。どういう話の展開になるか期待したいと思います。三番目は山門健一先生です。沖縄大学法経学部の教授でございます。この御三方の中では一番実践に強い先生なので，これからどうしたらよいかという話を一番具体的にお聞きできるはずです。パンフレットによれば，地域で色々な取り組みをしたり，実践的なテーマで著書を出されていると，でております。今日は，専門とされている分野も活動のタイプも違っている御三方をパネラーに迎えて「奄美の自立と経済戦略」という非常に重たいテーマを扱います。いくら考えてみてもですね，このバラエティに富んだ御三方の議論から産業戦略が出てくるのかど

うか。今朝まで考えたのですが答えはでておりません。今からの2時間あまりのなかで一体何が見えてくるのか。むしろここの会場におられる皆様方のご協力をいただきながら，できるだけ熱い議論になれば大成功ではないか，私はそのように考えております。

それではパネリストの方にご発言いただくのですが，最初は簡単に自己紹介をかねて，ご自分が今日お話になりたいことを少し丁寧に10分程度を1回目のめどにしております。これで第1ラウンドをやらさせていただきます。それから，私のほうから少しずつテーマを投げかけて，話を絡ませていければいいかなと思っております。

どうしても質問をしたいという場合は，途中で挙手をいただいて結構でございます。ただ，相互にご議論いただいた後に，私どもの心づもりとして30分程度は会場とやりとりをしたい。名瀬の方ではですね，もうやめたい，司会が短くして下さいとお願いをしても，やめて下さらないような熱心な方々ばかりでした。今日もそういう白熱した議論になることを期待したいと思います。そういう私のお願いを挨拶にかえまして，実際に各パネラーの方の発表に入らさせて頂きたいと思います。まず最初に矢田先生からお願いしてよろしいでしょうか。

矢田　こちらに，今日のシンポジウムに参加してほしいということで一月前ほどに話がありました。すぐに「はい，分かりました」と了解致しました。理由が二つありまして，一度も行ったことがないのでただ行ってみたい，島をみてみたい，そしてそれに関わって勉強してみたい。これが最大の理由でありました。今年退職いたしまして来年からの仕事まで1年間ちょうどブランクがあるので，できるだけ色んなところを見てみたい。それでこういう機会を有難く活用したい，これが最大の理由であります。したがって，こちらでポジティヴな発言をするだけの情報を持っておりません。

二番目は，これぐらいの歳になりますと，色んな大学で色んなプロジェクトについて，書類を見たり審査したり評価したりする機会が非常に多い。この鹿児島大学の島嶼圏プロジェクトについては，実は私もかなりていねいに書類を読んだことがあり，大変興味を持っておりました。会場の皆さんにとって，なかなか大学は身近ではないでしょうけれども，国立大学は今年の4月に法人化しました。法人化のねらいの一つに地域貢献という地域に根ざした大学づくり，研究教育づくりを明確な方針を持ってやりなさいということになっています。しかし，法人化する前からこのプロジェクトを鹿児島大学が実行していました。特定の人が非常にしつこく地域を研究するということは割と大学の先生は得意なのですが，色んな専門家が地域を総合的に研究するというのはあんまり成功したことがない。特に文系は色々な人がいまして，並べて本を書くのは楽なんですが，総合的に深みがある研究をするということはあんまり成功したことがない。特に戦後ボス教授などがいなくなってだんだん民主的になってくると，共同研究は，なかなか難しい。しかし組織として地域に根ざすかどうかというところで，鹿児島大学の島嶼圏研究はかなり目立ったプロジェクトとして，私はみております。そういうところから，一体何が起きてどうなっているんだろうというところを知りたい。基本的には観察者として参加したいと思っております。了解した以上，私の仕事もやらなくてはならないかと思っております。

従いまして，10分間の中で私が今何を考え，どこで悩んでいるかという話をして1回目の責任を果たしたいと思っております。先ほどの第1部で御三方大変若い1960年代，70年代に生まれた方が，しかも何らかの形で地元に根ざした方が，そして地元を非常に強く意

識した方が，自分の専門を活かして研究した結果を報告しています。歴史文化という，あるいはアイデンティティーというキーワードで発表して，私としては来た甲斐があるなと感じるほど大変勉強になります。パネルディスカッションの３人の場合は1940年代生まれで，20歳ほど違います。地域的に，この地域から離れた，特に私は離れたところから見るという点では，だいぶ違った視点，違った話になると思うのですが，よろしくお願いします。

私は，国土構造といいますか，日本経済の空間システムの中で東京一極集中とか過密・過疎とか，あるいは中心・周辺とかということで，空間的な差異が生じている，そのメカニズムについて研究しています。この15年ほど，政府の国土デザインを策定する６～７人のコアグループの中に入っております。国土デザインとか地域振興というのは，本人がどういう視座で地域をみるかでだいぶ違ってきます。６～７人のコアグループの中で私だけが地方から飛行機に乗って，東京で行われる審議に参加しています。そこにはいわゆる東京の目というのがあります。これは特定の地域にこだわらないで北から南まで全体をどうデザインするか，どういったかたちで色んな公共投資や環境保全を進めていくかという議論であります。

他方，私は九州地方整備局で，九州長期ビジョン，これの策定にも十数年関わっております。02年に九州の長期ビジョンづくりの座長をつとめました。国土デザインよりもう少し目線を下に落として与論島までの九州のデザインをどうするか審議しました。

この二つの経験でいきますと，福岡から見た九州，東京から見た日本となってしまう。これらのデザインのもとで特定の地域をクリックすると，そこの地域が大きく出てきて，実態を詳細につかまえられる。それを全体的にズームアップすると本来の国土政策ができる。つまり，いわゆる地域の実態，現場についてきちっとした情報をもちながら，今後の10年のデザインをするというのが国土デザインだと思っております。私自身国土デザインづくりに参加しながら，自分の頭の中で特定の地域をクリックしたときに，見えない地域がある。九州の長期ビジョンを作ってみてもなかなか見えない地域がある。

一番気になったのが椎葉を中心とする九州山地であります。日向から，あるいは延岡から，往復一車線国道でしか役場に着かないんですね。しかも２時間から３時間かかる。片方は山の絶壁，下は谷の絶壁です。ほとんどの人が軽自動車しか乗らないんです。そういう地域がいくつか残っております。五木の奥とか西米良とか椎葉，こういう地域振興って何なんだろうと，私自身自信をもてなかった。もうひとつは色んな地域がありまして，一つにはくくれませんが，五島，南西諸島，いわゆる離島といわれる地域の振興というのが一般的な図式でできるのだろうか。これは私自身が分からなかった。したがって九州地方整備局と話をしまして，若い官僚と一緒に上五島と椎葉のありかたについてかなり調査し，現地から情報を集めてきています。今そういうプロジェクトを進めております。

で，なぜ私がここに来たかというと，やはり私から最も見えない地域の一つなのです。

学生時代にはビザをもって1ヶ月沖縄の奥間という所を中心にして調査いたしました。西表にも行きましたし，石垣，宮古にも。沖縄といわゆる本土，大和とはどういう文化的な差があるのかなどです。かなり前のことで，返還前のときです。それなりに皮膚感覚をもっています。その後も何回か行く機会がございました。もう一方，屋久島までは行っている。その南から与論までが私の頭の中ではもう一つイメージがわかない。ぜひ機会があったら，ということで参りました。

おそらく九州のデザインにしろ国土のデザインにしろ，なかなか明確でないわけであります。さわりだけ話をします。コピーを用意しました。全部話すつもりはありません。司会にふられたとき何ページを参照して話をしようという私の中のストックです。どんどんとばしていきます。2枚目の3の部分【図表1－矢田】では，私が担当している全国総合開発計画というのは，ここをも対象にしている奄美群島振興開発計画を含んでデザインしていることを示しています。次いで3枚目【図表2－矢田】，現在国土のグランドデザインという第5次全国総合開発計画においては，その南西軸というかたちで沖縄まで含めた国土軸という設定をしました。一体それで何をやろうとするのかについて，そのあとまた官僚とディスカッションしましたが，もう一つみえない。それにもかかわらず2007年に次の国土計画をつくるというということで今審議しております。当然この地域を含めて，何がポイントで何が問題か。次の国土計画では，開発という言葉を取り去ろうということになっています。文化・歴史・自然というものをどういうかたちでこの計画の中に取り入れていくかを議論しながら作りたいと思っております。

この脈絡からして次期国土計画は，もう霞ヶ関で日本の国土をどうデザインするかという発想をやめようと，私は強く思っています。東北，九州，首都圏，沖縄という各ブロックごとに計画を作って，それを重ね合わせて国土全体を調整するという国土計画にがらりと変えようというわけです。そういった意味では「自立連帯型国土」という言い方をしております。少し発想を変えてブロックごとの国土計画を作っていく。そのときブロックごとの内部の生活圏を整備する。これから高齢化の中で，医療・福祉・文化・教育といった生活のニーズに対応するために，そういったサービス機能を20～30万人単位できちっと整備していく。いわゆる開発の段階から生活の質向上といったところに重点を移す。

もうひとつの概念は二層の広域圏です。生活圏で色んな公共サービスを整えていくとともに，ブロック単位で計画を作っていく。生活圏は，人口規模30万人，大体拠点都市10万人位のところでカバーしておこうということです。しかし，その生活圏の構想でかたづかないという地域が沢山出てまいりました。一番大きいのが北海道の道東部で，それから日本の島嶼部です。それから九州山地を含めた地域で中心都市から1時間以内でいいサービスを受けられない地域です。これはこれで，かなり本格的に独自な戦略をやらないといけない。この島のなかを，昨日の午後と今日の午前中に色々案内していただきました。大変豊かで色々な施設が整っているので，それほど強力な政策が必要とは思いません。何が問題かということを整理しながらサポートする必要がある。もっとも厳しいのはやはり災害復旧という問題かなと思います。色々と島によって違います。高齢化社会の中で椎葉では，心臓病を起こしますと車ではとても運べなくて，二，三次病院まで2時間か3時間かかります。ヘリコプターをチャーターしようと思うと，手続きだけで時間がかかる。そういう点では高齢者の循環器系の病気を想定すると非常によくない地域が少なくない。これにいち早く対応するということを含めまして，よ

く調査をしなければと思っております。

今，椎葉，上五島，大分県の蒲江町という中心から離れた地域には，独自にどう戦略するかということを整理し，地域づくりの提案とする予定です。椎葉など九州山地における救急医療の体制をどう整備するかということです。かなり具体的な，ヘリコプターを買おうとか，そのための維持費をどうしようかとか，ヘリポートを作ろうとかですね，そういう詰めを，お医者さんと県の職員と国土交通省の人と私とで中心になってやっているところです。椎葉に初めて行ってから，これこそ国土づくりのポイントなんだと，私なりにこだわってやってきました。そういった点でもうひとつ私の頭にとって空白地域について，私自身もう少し五島と南西諸島の地域づくりとは何なのかを，勉強しようと思っております。以上です。

山田　ありがとうございました。それでは菅沼先生，すこし自己紹介を詳しくしていただきながら，今日の主題に入って頂ければと思います。

菅沼　沖永良部のみなさん，こんにちは。鹿児島大学農学部から参りました菅沼です。私，一度沖永良部に行ってみたいと思っておりました。というのは，沖永良部は明治時代から永良部百合という商品でもって日本を相手にではなくて，ヨーロッパを相手にしてやっておられた。これは奄美の中でも非常に突出しているという印象を持っておりました。歴史的にどういう理由でそういう経済活動が展開できたのかということを，一度自分の目で確かめたいと思っていました。今日来られて非常に幸せに感じております。

私は言葉でも分かりますように京都で生まれまして，30歳ぐらいになって鹿児島に参りました。京都という土地柄は都会なんですけども，意外と非常に閉鎖的なところがあります。昔は政治的中心であったということ，ＮＨＫのテレビでやっているように，新撰組ですね。いつお上が変わるか分からないということで，よそから来る人に対して非常に用心深い。ある人に肩入れすると，いつ裏目に出るか分からないことを恐れて意外と閉鎖的なところがあります。一方で，明治時代，東京が政治文化の中心に移ったために，東京に対する対抗意識が強いというようなところがあります。そうした土地柄に育った私から見て，沖永良部は独自の視点で鹿児島にも従属せず東京にもやらず，独自にヨーロッパに目をむけた点に非常に興味があります。それはちょっと置いておきまして，今日の話は，私の専門である農芸化学といって試験管をふる，食品，醤油とか味噌，酒そういった醸造関係の専門分野について述べたいと思います。

農学というのは私なりに定義しますと，他の工業技術に比べて環境に優しい生産技術というふうな捉え方をしております。それと今日の私の視点というのは，農業生産あるいは加工からみた産業戦略にあります。作った農産物をできるだけ付加価値を高めて輸出する，島から出すという加工技術についてお話したいと思います。特にどういった特産物作りをしたらいいか，いくつかの提案をしたいと考えております。

お手元に資料がありますけれども，**【図１－菅沼】**は今日のために私なりに考えたいくつかの重要なポイントを表しております。この中で，概略だけ説明しますが，**【図２－菅沼】**は奄美群島の農業生産物の産出額でどういった産物が金額的に多いかということを表しております。金額的にはですね，サトウキビがどうしても非常に比重が高いというところになります。ここ和泊においては，菊が第一番目，百合が第二番，肉用牛が三番目というふうになっておりますけれども，やはり奄美群島としてはサトウキビが中心になる。そこで，サトウキビの生産を中心にどういった

工夫ができるかいったところを【図３－菅沼】に記してまいりました。これのひとつの根拠ですが，サトウキビは経済投資効果が高いのです。ある作物の生産額が増えると島内の経済が何倍になって返ってくるかを示す指数でいうと，サトウキビが３とか４の数字になり，非常に投資効果が高いということがあります。サトウキビは製糖工場でまず粗糖というところまで作っております。それと，家内工業的に黒糖のお土産を作っている。そこまでは現在ある技術だと思います。【図４－菅沼】にありますのがオンラインショップによる砂糖の販売価格です。それでいきますと，上白糖というのが大体平均が１キロあたり200円くらいですね。それに比べて黒糖というのはオンラインショップでは高値が2400円，平均が940円くらい。つまり５倍から10倍くらい高い値で売れています。ただ量は売れない，もちろん。あと砂糖の特殊な作り方としては，四国にある和三盆という高級なお菓子に使われているようなタイプがあります。ですから，ひとつの提案としまして，粗糖ではなくて，もう少し付加価値を高めたかたちで新しいタイプの砂糖というようなものを，工夫して作れないかといったところです。それから黒糖焼酎ですね。サトウキビからの黒糖を利用して焼酎が作られているのですが，現実的には島内のサトウキビ，黒糖だけではブームで足りなくて，外国からの輸入でなりたっていると聞いております。やはりこの奄美の地域でしか作れない特産だということは確かだと思います。これに加えて，黒糖ビールといった新しいものも作ったらどうかということですね。と言いますのは，枕崎の焼酎メーカーが芋ビールというのを作っております。地ビールとして紫芋のきれいな色のついた芋ビールも作っております。それが結構好評で，薩摩料理を食べさせるような店で出したり，明治蔵という観光用にオープンした工場で出しています。また，百合で球根が廃棄処分になる百合根の規格外の品物が結構出ているということを聞いておりますので，それを利用してでんぷんや焼酎といったものも作る方法があるのではないか。あと，じゃがいもですね，すでに早出しということで成功されているんですけれども，さらに付加価値を高めるという意味であれば，北海道農試で新しく開発された紫芋系ですね。濃い色素があって抗酸化性が高いと注目されていますので，そういった紫芋系のじゃがいもを導入したりですね。サツマイモについても，そういった色素系のイモを導入するのもひとつの策かなというふうに思っております。あとはまたおいおい説明したいと思います。

山田　山門先生，最後までお待たせしました。地域振興で一番大事なのは，実際にやってみたらどんな問題が発生するのか，ではないかと考えています。そこはわざと最後のテーマにおいていますから，とりわけ沖縄の経験を伺う前に，最初，自己紹介を兼ねて一般論の方をお話し頂くありがたいと思います。

山門　三重県の熊野市，最近世界遺産に登録された熊野古道，伊勢の方から来る古道の近くに生まれました。沖縄に来て30年になります。おもしろいところだから，あちこち見てまわってきたのですが，ある時愕然としました。それまでは沖縄の人も当然，沖縄の特

性というのをちゃんとわきまえていると思っていたのです。しかしこれが全然できていないところがあるんじゃないかなということに気がつきました。

７，８年前のことですがＮＨＫ沖縄放送局が，夕方の６時台のニュースで，クリスマスの日でしたが，まあクリスマスといっても暖かいので水割りの泡盛など飲みながらテレビをつけて夕刊を読んでいたのです。すると突然ＮＨＫのアナウンサーが沖縄本島南部の糸満の小学校でヒマワリが咲いたとしゃべっている。校長先生にインタビューしているんですけど，校長先生も驚いているんです。何をバカなことを言っているのかなあと思いました。咲くのは当然なんですよね，亜熱帯だから。北海道ならともかく沖縄はヒマワリは一年中咲くんです。ところが，ＮＨＫも校長先生も驚いている。咲くはずのないヒマワリが咲いた，と。それで小学校の先生何人かに聞いてみました。やっぱりみんな夏の花だと言うんですね。これは教科書に問題があると思いました。沖縄は戦後，独自の教科書を作ろうという動きもあったんです。しかし実際は日本政府にお願いして東京で作られた教科書を送ってもらって，それで教育を受けてきたわけですね。東京の人と変わらないものの見方ができてしまっているところがある。大学１年生に，氷，ヒマワリ，サクラ，ハイビスカスを関係の深い季節と結びなさいというミニテストをしたところ，氷は面白かったんですけど，４分の１くらいは夏だという。「氷はほんとうに夏か？」っていったら，「先生，絶対夏だ」という。本土の場合は冬になると寒くなって池の水が凍る。小学校に入って零度になったら水は凍るということを教わるんですけども，沖縄では絶対に零度にはならない。子どもたちの目の前にふんだんに氷がでてくるのは夏なんです，逆に。だから氷っていうと夏となる。で，ヒマワリはというと，圧倒的に夏なんですね。教科書でおそらく５月頃種をまいて夏に花を楽しむ，そうなっていると思います。サクラは沖縄では１月の下旬ですけれども，冬と答えたのは２，３名で，あとはほとんど全員春なんですよね。これも教科書ですよね。それにテレビが春になるとサクラ前線がどこまで来たとか，言っていますから，ああいうのを毎日見ているとサクラは春なんだと思ってしまうのでしょう。教科書とマスコミに問題がある。自分たちの地域の特性をきちんと理解できなくては，地域おこしとはつながらないですよね。

花の先進地は沖永良部で，沖縄は後発ですけれども，菊，花卉栽培が伸びてきました。不況でこのところちょっと落ち込んでいますけど，一時は200億円，サトウキビを上回るほどの生産を達成していました。私は，何年か前，沖縄大学の移動市民大学の運営委員長で沖永良部に来たことがあります。その時に，講師として沖縄の「太陽の花」の組合長に来ていただいたことがあります。ちょうど円高で球根の輸出が難しくなって切花の動きが，出てきたところだったと思います。こんなことがありました。沖永良部の農民が「上間さん，私の菊を見てほしい」と言ったのです。その菊を見て上間さんはびっくりした。「私たちが沖縄で作っている菊より立派です。さすが沖永良部ですね。」その農民は「沖縄より立派だというけど，なぜ私たちの菊は市場に出したら値段が沖縄より安いのか」と聞きました。上間さんはこう答えた。「それがブランドです。ブランドの力です。私たち『太陽の花』は信頼されている。『太陽の花』のロゴマークがついたダンボールが市場に入ってくるだけで，高い値段がポンと付く。あなたがたはまだ信用されてないから，ダンボールを開けてみる。いい花だ，しかし下のほうには悪いのも混じっているんだろう，とひっくり返す。検査費用がかかるから，その分安くなるんです。」ということで，やっぱり信頼の確立，ブランドの確立というのがいかに大事か

という話になったのですけど，非常に印象的な話でした。

上間良廣さんは，アメリカに行って最先端の農場で花の栽培を学んでいたんですが，あるとき疑問を感じた。中米のコロンビアから来る花に勝てない。で，コロンビアに飛んだところ，カリフォルニアの日系人が栽培してアメリカに輸出していた。暖かさには勝てない，暖かさは素晴らしいものだ，とその時感じた。そして沖縄は日本の中南米になれる，そういう確信を持って沖縄に帰ってきて，菊栽培を軌道に乗せていくわけですけれども，きちんと地域特性を把握する，外から島を見つめてみる，他と比較する，そういうことを徹底的にやらないといけない。

私たちは移動市民大学に力を入れてきたわけですけれども，奄美では10年間で閉じました。今は大学周辺，沖縄の離島で少し規模を縮小してやっておりますけども，当初の教養的啓蒙的なものから，地域が局面している課題にぶつかっていこうというかたちでいろいろ取り組んでいます。今，大学を拠点に那覇市と連携してやっているのがエコシティづくり，那覇の商店街と連携してやっているのが「ムイクワの香が漂うまちづくり」です。ムイクワというのはジャスミンのことなんですけど，ジャスミンの首里方言がムイクワです。それをひとつベースにしながら伝統的な食文化の見直し，そして町の緑化，そういったことに取り組んでいるところです。

山田　ありがとうございました。矢田先生の言われた話といえば，先生の頭の中で外向きの地図は作ってあるけれども，うまく像が結べない地域のひとつが南西諸島であるという率直なご発言だったと思うんです。そういう地域を活性化しようと政府がずいぶん力をいれております。しかしながらそれは，特定地域何とかという振興計画ではありません。今流行りといいますか，最近出てきたのに，特区制度というのがございます。これは，制度は特区なんですが中身は何でも入れられる，こういう話なんですね。これは先生がずっと携わってこられてる国土計画の中でいくと，どういう位置になるんでしょうか。それともうひとつ，先生は立地の専門だと思うんですが，先ほどのお話の中では立地論というよりも定住圏といいいますか，住民生活にウェイトのある話だったと思っております。私が何を言いたいのかといいますと，特区論の重心は産業的な面において考えていいのではないか，それが従来の全国の国土計画でうまく包めなかった地域をカバーしていく新手法になるのかならないのか，という挑発をさせていただきたい，こういうふうに思っております。

矢田　ありがとうございます。挑発される立場でございますので，誠意をもって答えたいと思います。われわれ全国的な計画を作っていくと，計画作りはあっても実際に金をつけてプロジェクトを実行するのは，各国土交通省であり農林水産省です。ものによっては文部科学省です。地域の中ではこれがどこの管轄だとかまったく考えないでトータルで提案するんですけど，国の補助となりますと省庁別の縦割りに分割されます。どこの官庁だとか関係なく全体で計画づくりしても最後は官庁の縦割り，露骨に言えば県庁もほとんど縦

割り，国土交通省のプロジェクトを県が縦割りでやるということになります。地元から色々な提案をやっても，そこの規則に阻まれてチェックされる。今むしろ地域開発の中で一番問題なのが，お金もありますが官僚が非常にまじめに規則どおりにやるので，色々なアイデアについてだめになるのが多いです。それを今回特区制ということで，官僚の縦割りから離れた政策を実施しようということです。

私も特区に関わっているのですが，学部長をやっていたときにビジネススクールを作りました。そのときに，学生はかなりの部分留学生です。夜やります。ちょっと調べたら夜勉強する外国人は入国を拒否します。つまり，昼はアルバイトをする。だから夜間留学生にはビザはださない。これは法務省ですのでもうにっちもさっちもいかない。そう思って福岡県と相談して特区を申請したんです。福岡市の夜間，特に九大ビジネススクールについては特区として申請する。半年で認められました。おかげさまで今年からは夜間だけの留学生にもビザがでることとなりました。これがすぐ横浜でも実現しました。地元がこれをやりたいと思ったときに，必ずこういう規則でだめですという人が市であれ町であれ県であれ，出てくるんですが，特区で申請して大変よかった。例えばきちんと確かめていませんが，対馬でハングルを高校の教育科目に入れているんです。必修かどうかは分かりませんが，それも特区で申請しました。また，これは特区とは直接関係ないですけども，そこから釜山の国立大学に推薦枠を作った。これも対馬独自の発想です。地域振興をするときにあまり規則とか関係なく計画をつくり，市や町が実行しようとするときに，ぜひということがあればかなり実現できるようになりました。その代わりお金はでない，規制は緩和する，発想は地域だということで，私は大きな地域計画の話と個々の地域からでてくるプロジェクトをくっつけていくのも，なかなか面白い話だと思っております。その辺は今の時代にふさわしい。これまでの半世紀は官僚のネットが全部張り巡らされてきた。大学に行ってもすぐ分かりますが，色々なことが全部文科省の規則で身動きできないんです。それをあきらめないで特区という形で申請していく。それが地域の力だと思っておりますので，それほど矛盾しないし，地域の力が試される大変面白いことではないかと思っております。

山田　ありがとうございました。対立するものじゃなくてうまく使えば壁を打ち破れるよという話だったので，心強く聞いた次第なんです。ところで，菅沼先生，僕はびっくりしたんです。沖永良部の百合根の商売が上手なんで，菅沼先生はとっても興味があった。先生が商売に興味があるなんて今日始めて聞きました。それも今の矢田先生の話と引っ掛けて言えば，特産品ということでいくつか品目まで挙げていただきました。強いか弱いかは別として，今まで大体のところそれぞれの島で程度はあれ試みられている。それがうまくいかないのは逆に補助金を使うからうまくいかないのではないかと，私は思ってるんです。先生の視野の中にはほとんどそれが入ってないんじゃないか。たとえば，ある町の話なんですが，構造改善事業とかで立派な建物を作るんです。そこは女性たちが中心になって色んなものを作れますよという設備なんですが，１年で利用する日数が30日くらいしかない。そこに人が２人くらい配置されている。そういうところに実際見学に行きました。今，先生が挙げられたようないくつかの仕掛けといいますか，特産品の候補をいくつかあげていただきましたが，技術的にもきっと可能だから先生も挙げられたんじゃないかと思うんです。それをうまく成功させるにはどのようなスタイルをお考えですか。変化球で申し訳あ

りませんが，何かお考えを聞かせていただければと思います。

菅沼　それはちょっときつい質問です。補助金の話は，むしろ特産品というよりも，このあとで申し上げたかった環境保全の中で色んなゼロエミッションとかリサイクルのプロジェクトがありますよね，そちらの方が重要に思うんです。非常に莫大なお金が流れていて，それがないと成立しない計画が多いのではないかと。というのは，結局，廃物利用はもともと適正な原料が別にある場合が多いわけですね。その場合は目的物を抽出しやすく経費が安くでできるという構図ができあがります。ところが廃棄物というのは目的物の濃度が薄いわけですよね。だから非常に効率が悪いのを，あえて利用するから高価な設備投資がいると。しかし，できあがった商品は価格は安い。価格が安いから誰かが補助を受けないと成立しない場合が多い。それとまた廃棄物，副産物利用の話では，定期的に原料が入ってこない場合が多い。デンプン粕の話で申しますと，サツマイモが入るのが大体9月から11月末くらいです。精製にだいたい90日から100日といわれていますのでその間しかデンプン粕というのが出てこない。そのデンプン粕を回収して，それを全部乾燥すれば腐りませんので，それなりの需要が考えられるんですけど，普通はやりません。それはやはり一年中供給できないということで，操業期間が短くなる。先生がおっしゃられるような問題がでてくるんだと思います。どういうところが問題かというところはですね，私は専門外で，価格形成とか市場形成といったところまでは分かりませんので，ちょっと即答しかねますので……すみません。

山田　いや，それを逃さないのが山田でございまして（笑）。大体学者というのは「それは私の専門外です」とか言って逃げられるようになっております。ここは大学ではありません，皆さん。そこで，言わさせていただくと，例えば，先生はサトウキビを強調されています。それからジャガイモを使ってというのがあります。例えばジャガイモにしましょう。ジャガイモのお話のときに……

菅沼　新しい品種を導入するという話ですね。

山田　それを加工品にするまでと考えて，ひとつ教えていただきたいのです。鹿児島は早い季節に出しますから，なまもので市場品価格を狙うところが多いですね。加工品にするのは規格外品が多いですよね。そしたら特産品を作る場合にどちらに利点があるんですか。さきほど規格外品がかなり出るから，それをこう加工したらいいという……

菅沼　それは百合根の場合で，百合根の球根として出しているらしいんです。昔のデータですが，年間200トンくらいあるらしいというふうに聞いてます。そういう規格外の百合根の球根の利用についてですが，百合根には15～20％のデンプンが含まれております。関西では百合根を食べますけども，その苦味が非常に特徴といわれております。なのでデンプンにしても苦味がちょっと入ってくる。逆にそれが特徴になるんじゃないかなと考えて提案させていただきました。ただその200トンというレベルがどの程度新しい特産物として位置づけられるか。それは山田先生のほうがご専門かと思います。

山田　ということで逃げられました。菅沼先生はどうやっても逃げるという逃げの名人だと思っております。山門先生，先生はご紹介でいきますと，実際的な活動にかなり関わっておられる。それが香りの分野だとお聞きしています。そもそもなぜ香りの分野にかなり思い入れが強いのか。そのあたり少しお話い

ただけると，どういう点だと皆さんが新しいことを着想するきっかけになるのかということも見えてきて面白いかと思います。

山門　沖縄に来て香りにびっくりする。ムーチーはこちらでもムーチーっていうんでしょうか。サンニン（ゲットウ，月桃）は佐多岬までありますけど，サンニンの葉っぱで包んで蒸した餅，ムーチーの文化は琉球文化圏で留まっている。しかしこれは琉球文化圏で生み出したものではない。雲南省のシーサンバンナでもまったく同じだといいますから，おそらく中国から伝わってきたんだろうと思います。本土からやってきて初めて食べる人は違和感を持つ。10人のうち７～８人が漢方臭いとか，なじめないとか，言う。沖縄の人は子どものころから母親の膝に抱かれて食べているから，違和感を持つ人はまずいないと思うんです。こういうサンニンをはじめ香りの植物がたくさんある。東京だったら，秋は金木犀，冬は沈丁花とか，この季節にはこの香りがというのがありますが，沖縄に来ると周年開花，一年中匂っているようなものもあるわけです。熱帯は違うなという感じですね。

そういうところから始まって，先ほどふれた「ムイクワの香りが漂うまちづくり」というのをやっています。いま，私の目の前に久米島の海洋深層水が置かれています。沖縄ではペットボトル入りのさんぴん茶が置かれることが多い。さんぴん茶というのはジャスミンティーのことです。中国では香片茶，シャンピエンチャーともいう。それがなまって，さんぴん茶になった。ジャスミンは15世紀にはおそらく中国から来ていたのではないかと思います。ジャスミン茶が商品として開発されたのは百数十年前だから，当時はおそらくジャスミンの苗木を庭に植えて，お茶に花を浮かべて飲んでいたのだろうと思います。商品化されているものは，茶葉をしいてそこにジャスミンの花を並べてさらに茶葉をしいて，層をなして一晩置くわけです。翌日その花をとってまた新しい花を入れて香りを茶葉に移す。こういうのを７，８回繰り返す。これが高級ジャスミン茶ですね。いま日本ではウーロン茶とかが有名になっているわけですが，北京は今でもジャスミン茶が主流なんです。皇帝が飲んでいたお茶です。そういった茶葉に香りをしみこませたさんぴん茶，スーパーに行けば売っております。それを買ってきてお湯を注いで飲んでいた，あるいは庭に植えた花を摘んで，お茶に浮かべて飲んでいた。これが戦後片隅に追いやられていった。アメリカという強い国が来ましたから，そこのアイスティー，コーラ，ソーダ水などにやられてしまった。気がついてみたら，さんぴん茶はオジー，オバーだけが飲むお茶になってしまったのです。

それを大ヒット商品にしたのが本土からきたポッカの水田さんという当時２７歳の人でした。よそ者の視点は非常に重要だと思うんですよね。本土にはない珍しいお茶，さんぴん茶に注目した。オジー，オバーが熱いお湯を注いで飲んでいる。これはいける，熱いお湯を注ぐのではなくて缶入りにして自動販売機で売れば絶対当たる，と。沖縄は暑いところだけども弁当が多い。おかずは食中毒にあわないように，揚げ物が多い。で，油っこいものを食べたあとこのさんぴん茶が絶対に合うと，奥さんと二人で試作品づくりを重ね，これでいけるということで取次店に持っていった。ところが，「さんぴん茶っていうのは熱いお湯を注いで飲むものであって，冷たいのは誰が飲むか」って笑われた。笑われても売れるという確信があったから，那覇空港に行ってタクシーの運転手に１本ずつ配った。タクシーの運転手は飲みかけの缶をハンドルのそばのホルダーに入れて走り出す。後ろに乗っていたお客さんが「珍しいのを飲んでいるな，自分も降りたら買って飲んでみよう」。じわじわじわじわ広がっていったんですね。

取次店の方から「若い人も飲んでいますよ」という電話がきた。「今だ」と，テレビコマーシャルを打ったところ，売り上げが急上昇した。

水田さんが来たとき，沖縄のポッカの年間売り上げは3億円ぐらいだったんですけれど，一昨年に聞いたところ，30億円なんですね。あそこの主力商品はもともと缶コーヒーです。ポッカの社長は缶コーヒーを開発したことで有名なんですけれども，水田さんは社長に負けまいとがんばって，オジー，オバーが飲んでいたものをヒット商品にした。で，会社が儲かっただけではなかった。この原料は中国からきます。どこでお茶にして缶入り，ペットボトル入りにしているかというと，本島の北部の東村です。ここのパインの缶詰工場は忙しい時期がありましたが，パインの自由化で仕事もなくなっていた。そこでやっています。東村にとっては棚からボタモチですよね。村民所得が12%上がったわけです。県に所得統計を報告したところ，県は異常な数字が来たものだから，これは計算間違いだろうと村に電話を入れた。東村は，待ってましたとばかりに，計算間違いではありません，これこれこういうわけで所得水準があがりましたと答えたというのです。ポッカがこれをやったら，他のメーカーもさんぴん茶を東村の工場で作るようになった。ポッカの売り上げが伸びただけじゃなくて東村の村民所得まで大きく伸ばした。外に出して稼ぐ特産品も大事なんですけれども地域の市場が，外国，県外からくるものにやられているわけですよね。輸入代替，移入代替を追求することも重要だと思います。

私がやっている運動はこのさんぴん茶とは別で，庭にジャスミンを植えてもらってその花を摘んで飲む，この昔ながらの飲み方を復活させるというものです。これを地域の他の資源と結びつけようとしています。焼き物の町がありますけども，そこのお店にお客さんがやって来る。当然コーラなんか出さない。缶入りのさんぴん茶なんかも出さない。自分たちの窯で焼いた湯飲みにお茶を入れて出すでしょう。そこに花が一輪浮かんでいたらどうなるか。「これは何の花ですか」「これはジャスミン，沖縄ではムイクワといいます。インドが原産で中国からきて・・・」となったら，ありがとうございましたと，ただでは帰れないと思うんですね。そういうふうに地域の資源と結びつけてもいい。私たちそういうことをやってきたんですけど，あるバーテンダーがジャスミンでカクテルを作った。ジャスミンティーの茶葉に泡盛をそそぎ，一晩置く。リキュールで甘みをつけ，きれいなグラスに入れ，ムイクワの花を浮かべて出すんです。これがとっても格好がよくて，あるホテルの支配人が感激して，うちの定番にしたいと言っています。

そういうふうに自分たちで工夫しながらいろいろなものが生まれてくるというのが，まちづくりにとって一番大事だと思うんですよね。補助金が切れたら終わりというようなまちづくりじゃしょうがないので，自分たちでやらないといけない。そのために自分たちの足元の資源を徹底的に掘り起こすというのが必要かなと思います。

沖縄が復帰するとき，大量の失業者がでることが予想されました。失業者を吸収するために沖縄県が一生懸命になって石油基地を誘致したわけです。われわれが米軍の支配下で苦しい生活を送っているとき，日本は高度成長を遂げた，所得水準も高まった，その背景には石油があった。われわれも復帰したんだから，その石油文明，高度成長の恩恵にあずかる権利があるというので，石油基地を誘致した。関連産業に対する期待もあったが，興るわけがない。中継基地ですからね，輸送のための。そのころ，芋は「イモ，ハダシ」といって貧乏生活の象徴でした。石油基地は今，業務も縮小し雇用も減ってきている。他方，

かつてバカにされた芋ですが，読谷村の主婦がこの紅芋からお菓子を作り，さらにポルシェという会社を作って百数十人雇っている。お菓子御殿も作った。観光バスがたくさん停まっている。やはりさんぴん茶も芋もバカにしちゃいけないです。足元に地域おこしのすばらしいヒントがあると思うんですね。沖縄はヤマト世からアメリカ世，アメリカ世からヤマト世へと，世替わりが激しかった。そのたびにいろんなものが入り込んできて地元の文化が隅っこに追いやられたんです。しかし食文化を含めて自分たちの文化に自信を持つということが地域おこしにとって一番大事なことなんじゃないかなあと，私はそう思います。

菅沼　すこし補足していいですか。

山田　補足より，堂々と対話をやってください。三人の間でやっていただくと助かります。どうぞ。

菅沼　今，サツマイモの紅芋の話がでたので，資料【図５－菅沼】の中にサツマイモ新品種と移出処理というものがあります。それを用いて少し説明しますと，サツマイモはですね，もちろん奄美地区からは鹿児島に移出できないわけですね。というのは，特定病害虫であるアリモドキゾウムシが常在しているからです。お話にでてきた読谷村の紅芋は蒸煮殺虫装置で表面だけを弱く加熱するんですね。虫が死ぬ程度の45℃とか50℃とかの弱い加熱をして，芋が変質しない程度に蒸気で蒸煮殺虫処理するんです。そうすると移出が認められるため，特定の販売ルートで販売されています。この装置が奄美大島のほうにも入っているらしいとの情報だけは聞いております。だから，これを利用したサツマイモ存来種を特産物にするというのも可能かなと考えております。

山田　私，今，山門先生の話を聞き，後で菅沼先生をいじめてみようと心づもりをしたところですが，先にお答えのほうが出てまいりました。矢田先生，先生は学生時代に１ヶ月，沖縄のほうにおられて沖縄を体感しておられるということですし，その後も何度か訪ねているという話でした。地域が発展するという場合には，従来の外からか内からかの議論は別にして，経済発展だけが重視されるのはだめだよという観点から定住生活といいますか，住民生活に必要なところをかなり強調されている話として聞きました。非常に面白いんですが，地域にある資源で地域興しができるんだよという両先生のお話は，先ほど先生が言われました次の全国総合開発計画の中でうまく位置づけられているんでしょうか。それとも，それは地域が勝手に自分の能力でがんばるんだよという主体性論に陥るんでしょうか。

矢田　資料【図表３―矢田】を見ていただきたいのですが，私なりに勉強してきました。予習しないでくると大変失礼なのでできるだけ論文を読んだりネットで調べたりして，島外収支概念図というものを作りました。お金の絶対額は分かりませんが，これは先ほどの皆村先生の講演と非常に一致してるんで安心しております。数値の入手ルートは別ですが，おそらくここの豊かなところというのは右側の産業生産のところで，花卉とか焼酎類は非常に安定した収入源になっていて，島外市場に出して金が入ってくる。この金と奄美振興事業を含めた国・県の公共投資資金の両方から入ってくる。おそらく，これ以外に，島外の方の送金とか年金とかいうかたちで島外から金が入ってくると思いますが，観光はもうひとつ弱いのかと思います。こういったものがまわりまわって消費になって，先ほどでてきたＡコープにいって，それがそっくり島外へいく。

そして島民の生活，いわゆる自給率といい

ますか，ここで作った野菜をここで販売するといった生産と消費をぐるぐるまわしていく。今のところ花を中心としてかなり安定しているので，おそらく離島の中では平均所得が日本の離島でトップ3に入っている。あるいは公共投資，奄美振興事業が依然として役割が大きいのではないのかなと言えるんです。ただ長期的に見るといくつか弱点があります。日本の国家財政が非常に緊縮し，できるだけ補助金をへらすというときに，この一番下のルートというのが長期的に安定する見通しがない。奄美だけではなくてですね。したがって，このルートが細くなるというのが予想される点です。近年はなかなか都市系の代議士の意見が強いですから，地方へばらまきができないということで，今後，地方はかなり不利になっていきます。

そしてもうひとつは，花卉の本土への移出が非常にうまくいっているのですが，東京マーケットあるいは大都市マーケットの中で，こういった商品が外国製品との競争のなかで国際競争力を持ち続けられるのか。価格的にはかなり厳しいので，質でいきましょうというのは当然ですが，安定したルートを確保できるかというのが，第二の問題点です。相当のアンテナをはっておくし，逆にＩＴを使ってホームページを立ちあげながら，どんどん地域ブランド化していく。消費者の頭の中にこびりつくほどに。今から仕掛けていかないと，グローバリゼーションの中で今のようなことがどこまで維持できるかが課題となります。

こうしたシステムは，皆さんがまじめにやって，市場動向をみながら，かなりうまくやってきた個別経営の集合であり，役場，農協，商工会の人たちのディスカッションの中でできあがったものなんです。しかし，個別にやってくると，トータルとして島の自然，特に水循環，農薬の循環とかいうものが安定するとは限らない。自然基盤が危ないという話がでてくる。これはやっぱり島外も含めた研究者の力を借りて，このコントロールをしなければならない。

このシステムをより永続的持続的なものにする。今の安定した時期に，こうした3つの弱点について，手を打つことが大切だと思います。経済ではお金はポートフォリオといって，色んなところに投資し，特定の投資がこけても他のところで何とかもつようにする。相当の長期的な市場動向を見て，新製品の開発をしたり，特定の製品でかなり偏った場合は多品種目にする，といったようなことをやっていく。こうした地域全体の経営をコントロールできる地域の力，行政と住民，生産者の力というものがあることが地域力です。積極的に必要な島外の知恵を，島外の企業をうまく誘導していけばいいわけです。むしろ地域力，地域全体がこのシステムを，今から将来をみてどう手を打つか，その中で次の芽と真剣に取り組んでいくということが重要だと思っております。

山田　ありがとうございました。もう少しあとで将来の方向性の話をと思っていたのですが，矢田先生からは具体的な，しかしながら大きな方向付けの話がでたかと思います。まだ菅沼先生のほうは，そういう抽象度の高い話にはいかさないと，手ぐすねを引いて待っておられるようです。ひとつは特産品という定義に関わるところなんです。山門先生は地域を外から見ると，かえってよく見えるという例を挙げて，もっと地域の特性をしっかり見極めなさいということを強調されています。それに引きつけて言えば，菅沼先生が，技術的に可能な特産品を作っていこうとする。今から新しい技術を使って生み出していく。そうすると特産品ってどういう定義になるんだろうかということが，私にはよく分かりません。だから先生自身が言葉の使い方として，これから新製品を開発することを特産品と呼

ぶとすれば，具体的な事例のレベルでサトウキビを使って黒ビールができないかという話があった。これは面白いと思います。北の黒ビールに対抗して南の黒ビールであると。意外と北と南というのは日本人は引き合いまして，先生もご存知のように，鹿児島では北海道物産展というのがおおはやりですよね。そういうのが大変面白いと思うのですが，この新しい商品開発も，先生の概念の中で特産品になるんですかね。それは技術的にもコスト的にも成り立っていけますか。

菅沼　黒糖ビールに限ってお話しさせていただくと，昨日，３年生の歓迎会があったのですが，意外とビールを飲まない女性が増えている。なんでビールを飲まないか。普通はビールが最初で，そのあと焼酎というのが大体飲み会のパターンなんですけども，最初からビールを飲まない。甘いカクテルを飲んでるんですね。ビールは苦いと言うんです。苦味が受け付けないと言うんです。ビールのいいところは口当たりがさわやかで，のどごしがいい点にあると思うんです。そこで黒糖ビールだと苦味なしのビールが作れるんじゃないかということで提案しました。技術的には原料の黒糖は糖成分ですので，非常に簡単にビールができると思います。あの苦味成分のホップというのが雑菌防御という目的で使われているんですね。ところが，今の技術は無菌的に微生物を培養することができるので，ホップなしで苦みのないビールをつくることは技術的には可能と思います。特産品という点については，サトウキビ，黒糖というのは非常に地域性の高い食品素材と考えますので，私の中では単純に特産品と考えています。

山田　先ほどから山門先生がしゃべりたくてうずうずしているのを，私押さえておりました。どうぞ先生。

山門　私は，沖縄県経営者協会の地域づくりの人材養成塾の講師を15年やっているんですが，そのときの１期生が南部の玉城（たまぐすく）村の商工会にいるんです。彼が中心になってサトウキビ酢っていうのを開発したんですね。今年の７月でしたか，ＮＨＫの「21世紀ビジネス塾」でも紹介されました。特産品をつくって移出して「外貨」を稼ぐというのと，観光でよそから人に来てもらってお金を落としてもらう。同じお金ですよ。

今，沖縄には修学旅行生がたくさん来ます。もう20年くらい前ですけど，沖縄大学が中心になって「沖縄戦と米軍基地を考える沖縄セミナー」っていうのをやりました。そしたら私立高校の先生が大勢来た。広島と同じように平和学習の場として考えたいと。で，次の年は生徒を連れてくるんです。県の観光文化局にどれくらい修学旅行に来ているのかと聞いたら，30校でした。10年やってセミナーを閉じるとき，また聞いてみました。600校になっていました。今どれだけ来ているのかというと，去年は小中高，専門学校合わせて約2000校42万人です。体験学習などもいろいろあるんですけど，一番人気があるのはウージ倒しです。サトウキビ倒しです。サトウキビ刈りにはシーズンがあるんじゃないのと聞いたら，いや，サトウキビシーズンというのは製糖会社が作ったイデオロギーだ，いつでもできる，と言うんです。農家と契約して修学旅行生のためのウージ倒し用の畑を持っている。

皆さんご存知だと思うんですけど，サトウキビは，江戸時代までは，関東までありました。明治になって，どんどん外国の精製糖が入ってくる。幕末の日本では，まだ日本ではなかった沖縄を含め，最大のサトウキビの産地は讃岐だったんですけれども，その讃岐が大打撃を受けるわけですね。讃岐では今でも少し残っていて，和菓子の原料，和三盆をつくっていますけど，外国からの砂糖にやられ

て本土のサトウキビは全滅してしまう。しかし沖縄，奄美は外国のものと競合しなかった，黒糖だったから。本土は全滅状態だけど，沖縄，奄美は大丈夫だった。復帰の前に，本土から農林大臣が来て「沖縄の百姓は怠け者だ，畑にススキばっかり生やしているではないか」といったという笑い話があります。本土の人はサトウキビを知らない。沖縄に来てこれが砂糖の原料か，ウージ倒しをやってみたいと修学旅行生が言う。考えてみますと，こういうのも資源ですね。

山田　ありがとうございます。司会ですが，少し話をさせていただきます。それぞれ地域の経済を改革するときに，先ほど山門先生がおっしゃったように，ある特産品を作って外に出す，それから外から人に来てもらってお金を落としてもらう。落ちるお金で経済が潤うのは一緒だということなんです。私奄美ミュージアム構想という奄美全島を対象としたソフト事業の顧問ということなので，出席しております。あそこの中心にある関心をみてますと，どうも観光と特産品を結びつけて考えろという方向に行きつつあります。そこで私は，山門先生が今，言われたのと同じことを申し上げたんです。

それは何かといいますと，沖縄は今お聞きしますと，修学旅行が2000校42万人だとか。これとまったく対照的なケースがあります。種子島，屋久島です。私が最初に調査に入った90年ごろ，今から14，５年前になります。そのとき，種子島は５万人から６万人高校生を迎えておりました。当時あそこには対応できるだけの宿泊施設がありませんでした。どういうふうにして高校生が訪ねてきたかといいますと，大型の船で来て船に宿泊して，それからロケットなどのところを見学する。そのあとは山門先生の話と重なるんですが，サトウキビだったかどうかは分かりませんが，かなり農作業をして帰るというパターンです。ところがこの十数年間で様子ががらーっと変わって，今ほとんど来てないんじゃないでしょうか。ずいぶん変わりました。外国と競争をしているという沖縄は，逆に高校生を引っ張って増えている。非常に対照的なお話だと思って今聞きました。対象の素材はまったく一緒，高校生の修学旅行で地域によって，あるいは取り組み方によって一方では増え，一方では減るんだなあと思いながら聞いたところでございました。

では，そろそろ時間も17時半をまわったようですので，ここで会場におられる方にまわして色んなご意見をぶつけていただき，少し白熱した状況を作ってみたいという思いつきですが，いかがでしょうか。

会場からご質問を受けつけて，先生方から，お答えをいただけますでしょうか。

上原　矢田先生が初来島ということで，歓迎を込めてご意見を伺いたいと思います。４，５年前に島嶼議会で，広域連携だとか交流実行について訴えていたと思います。本日の第１部を踏まえて，本島の今後の交流について，何か感想があれば聞かせていただきたい。それから，先生は九州山地や上五島などの地域調査をされているようですが，こういう内海離島の独特な地域政策，先ほどの医療産業などの視点から，ご意見をお聞かせいただければと思います。

矢田　昨日の午後と今日の午前中に，ほとんどのところを地元の人の解説付きで見てまわりました。いってみれば幸せで豊かないい島だなという感じをもちました。歴史的な重みを持ちつつ人々がかなり訪れる町にできないでしょうか。もっと大都市から人を惹き付ける宣伝をやれば，交流人口を増やすということも，もう一つ戦略としてやっていけないかな。そのへんの仕掛けが必要かなと思います。魅力的な島で，観光資源もあるし特産物もあるし，本格的にやれば相当なレベルまで人を惹き付けられる。離島地域はそれぞれ多様性があります。五島，南西諸島など。やっぱり厳しいのは九州山地の方で，そこは命に関わる僻地が多い。ここは島を拠点にした大きな病院も，医療ネットもあるし，緊急の場合は自衛隊も動くということです。かなり高齢化したときの最大の問題は医療なんです，70歳～80歳になったとき……。これが手当ができるか町かどうか最大の問題なんです。それこそが政策だと思っているんです。台風がきたときとか条件が悪いときの問題はありますが。なかなかそういう点でも恵まれているかなと思っています。やっぱり意外と厳しいのは山地の中かなという感じをもっています。ある面では飛行機とヘリコプターと海でつないでいけばかなりやっていける。

泉　島嶼の研究をなさっている先生方だけあって，非常に詳しくご教示いただき，勉強になりました。

奄美の復帰以来，色々な事業を導入し，社会資本の整備をすすめてきました。その中の基幹産業の農業を例にとりますと，昭和50年，国の農業生産額が８兆8780億円でした。平成13年８兆8740億円，少し右肩下がりであります。それにひきかえ私たちの鹿児島県は，昭和50年には全国第12位の農業生産高でした。それが平成13年になりますと，全国第４位まで飛躍してきました。鹿児島県の伸び率が147％，奄美は実に170％の伸び率です。この島だけをみますと，180％の伸び率となっています。和泊町だけを例に取りますと208％伸びています。沖縄県は137％です。先ほど山門先生のご指摘の中に，太陽の花の上間組合長さんはコロンビアの視察をしたという話がありました。本町も島の農業の振興に非常に力をいれており，農業後継者の育成資金や「次の和泊農業を考える会」などを設けています。

今年も花王国オランダをはじめ，東南アジアのマレーシア，それからニュージーランド，色んな島を視察して勉強させてもらっています。沖縄の話がずっと出てきましたが沖縄全県と比較して，切り花だけに限定いたしますと，和泊町だけで全国の４分の１を生産しています。かつては沖縄の品目は２通りでした。サトウキビ・野菜，畜産・花卉でした。いま花卉が特に衰えています。奄美でも，いま菅沼先生は花の品種別に見ていらっしゃいましたから４位にまでおちていますが，花卉だけでまとめますと非常に伸びてはきていますけれども。いま全国的な経済性の中で，これから如何に産業の開発をしていかなければならないのか色々模索しているところです。

ひとことお尋ねしたいのは，御三方がおっしゃっていたようですが，沖縄県が昭和47年の復帰以来，平成13年まで30年間，使った国費，振興開発事業が６兆7297億円であります。奄美が復帰以来，平成13年まで，40余年になりますが，その間に使った国費が１兆5706億円になります。沖縄県は復帰して，一人当たりに対して194,162円という投資をしております。奄美は一人当たり201,311円，7,644円の差があるわけですが，どこで使い間違いをしたのか。沖縄と比較してよく奄美はこう言われます。

沖縄は先ほどお話にありましたように，復帰したときに96万人の人口があった。これが135万人といわれておりますね，40万人近

く増えてきております。奄美は７万３千人ほど減っております。何が要因かは私ども時々論議するところですが，あまりにハード的な事業に投資しすぎた。これからソフト面にもう少し投資すべきだという気はしますけれど，なかなかできません。奄振事業のどこが使い道を誤っていたのか，先生方にご提案いただけるのではないかと思うのですが，ご意見宜しくお願いいたします。

山田　山門先生も沖縄についてはトータルで比較されたことはないと思いますのでちょっと困りましたが…。山門先生，申し訳ありませんが何か一言お願いできますでしょうか。

山門　奄美と沖縄の比較ですか。ずいぶん前に奄振の見直し作業のお手伝いをしたことがありますが…。人口の問題について話してみたいと思います。

沖縄の人口は一貫して増えている。もちろん過疎化している地域はたくさんありますが，人口が増えている離島もあります。竹富町は最近30年ぶりに４千人台を回復しました。大阪から，定年後の夫婦が小浜島に住み着いたからです。この二人は，実は，沖永良部にするか，小浜島にするか，最後まで迷っていたそうです。沖永良部にも何度も来た。同じくらい魅力的だったのですね。しかし最後は竹富町の小浜島に決めた。ＮＨＫの朝ドラの「ちゅらさん」が人気番組でしたが，「ちゅらさん」効果が大きかったのかなと地元では言っています。

私はガジュマルが好きなので，沖永良部に来たら是非お話したいと思っていたことがあります。国頭小学校のガジュマルは日本一のガジュマルといわれています。しかし，枝を支えている，建築現場にあるような支柱はずしたほうがよいと思います。ヒゲ（気根）を活用すべきです。名瀬の港の近くにあるガジュマルはおもしろい。遠くから見ると７本並んでいるように見えるけど，よく見ると直径10センチほどの枝で全部つながっている。実は１本の木なんですね。ガジュマルは屋久島あたりを北限とする熱帯系の樹木で絞め殺しの木，ストラングラー・ツリーと呼ばれ，ヒゲは絞め殺すための武器なんです。しかしこのヒゲをうまく活用すると，こんなことができる。

ガジュマルの仲間にベンガルボダイジュがあります。インドのカルカッタには，１本のベンガルボダイジュの木で森を形成しているのがあります。樹冠の直径が130メートルです。便利な世の中になったもので，現地に行かなくても，インターネットで検索すると，見ることができます。

ハワイのガジュマルもカルカッタほどではないがすばらしいものがたくさんある。Banyantree，Hawaiiなどのキーワードで検索してみてください。ガジュマルの特性をきちんと把握して，活用すべきだと思います。そうやって魅力づくりをすべきだと思います。

足元の資源を活用しながら，「行って見たい，住んでみたい」，そんなまちづくりを進めることが大切だと思います。

山田　それでは次に矢田先生，全国マクロ的な話で申し訳ありませんが，お願いいたします。

矢田　沖振と奄振との比較ですか。実証的にやっていないので難しいですね。沖縄というのは行政体として，しっかりしている。しかも九州を媒介としないで，東京と直接交渉していける。東京の政治家も安保のことで負担させているという意識もあって，かなりケアしていると思う。沖縄は沖縄で，100万人で規模が大きい。相当人材がいる。いろんな時代の流れをかなり確実にとらえるには，相当の人材がいる。

奄美は，奄美の意思形成機構がどうなっているか。上に県があって。比較的に動いているとはいえ，広域連合の意思形成がどうか。住民の意思が明確にまとまっているのだろうか。私の考えだと，間に中間行政があればあるほど無駄な金が出て，効果がない。奄美県だとか，奄美市だったらまた変わったのでしょうけど。複数のかなりおおきな市町村があって。組織同士の調整がいちばん難しい。話し合ってまとまることはない，日本では。日本の市町村は横のまとまりがヘタ。大学もヘタです。システム上の問題がある。意思形成，方針をトータルでもってしっかりやらないといけない。ハンディを乗り越えるだけの戦略をもつことが大切です。霞ヶ関の政策は鹿児島からいきなり沖縄へとぶ。奄美をどうするか意識するのは，奄振法のときだけです。もっと方針を発信していく力があれば，いろんな発信力をどうするか。みんな忙しい時代だから。えっと思うような戦略を地元から発信していく。それが人を惹き付ける。

山田　矢田先生，ありがとうございました。先生にお答えしていただくのにはきついところもあったのですが…。泉町長も出ておられた1月のシンポのときも，この話は出ていまして，本当につきあわせた議論をやる必要がある。基本的な構造は，奄振も沖振もハード中心で，そう変わらない。独自の研究課題だと思っていますが。矢田先生のお話でいえば，奄美は広域的にどうしたいのか。奄美の中で1つの意思を形成することがヘタだったのではないか。

それを今，変えようとして，奄美でも新しい動きが起こりつつある。注目しているのは奄美ミュージアム構想です。いろんな思いがあって入り組んでいるんですが。先田光演先生，最後に奄美ミュージアム構想についてご発言いただけないでしょうか。

先田　突然というより，こういうだいそれた指名になってしまって申しわけございません。今，奄美で新たな動きが二つほどありますので，そしてこの動きは直接私たちに関わって，このシンポジウムとつながるかも分かりませんので，少しご説明いたしたいと思います。

ひとつは重要生態系でございます。世界遺産に登録できるほど南西諸島の亜熱帯と珊瑚礁，隆起珊瑚礁でできた地形，それは重要だという認識のもとに動いております。私どもの沖永良部にもそんなに重要な生態系があるのかなあということで，県の方からもずいぶんご指導いただきました。またいろんな学者や研究者からもアドバイスを受けました。結局今のところ，沖永良部は隆起珊瑚礁の島ですのでカルスト地形を含めて，海の珊瑚礁が世界遺産にふさわしいかどうか。もうひとつは，大山周辺の鍾乳洞も非常に貴重なものだといいます。沖永良部にしかいないこうもりがいるんだそうでございます。絶滅危惧種だとのこと，これはもっと調査してほしいと要望しました。一昨年からありました宝探しを中心に，重要生態系が始まっているわけですが，次は島ごとにそれをどう活かすかというので，山田先生がおっしゃった奄美群島広域事務組合が取り組んでいるんです。

奄美群島広域事務組合でなぜ取り組んでいるのかというと，島ごとに皆，島をまるごと博物館にしようと提案しているからです。実は沖永良部郷土研究会では，3年ほど前から

集落全体を博物館にしようと出村先生の提案もありまして，そういうことに動き出したんです。ところが今度は，大島郡全体で島ごと博物館にしようと，その構想を打ち立てているのがこの組合になります。組合は実際の戦略を70作ってありますが，これを80ぐらいに拡大して，これを推進するお金を奄振のソフト事業にしていこうと考えている。この前の会合の中では奄美ミュージアム推進協議会というのを作って，今ご指摘がありました意思決定ができて，それを直接，奄振に主体的にもっていきたいという構想であります。

沖永良部で何ができるかと考えたときに，会議に出席しながら思うことでしたが，とりあえず先ほどありました観光事業を一体どうするのか。長期滞在型，観光農業，現在和泊町の進めているタラソを含めた癒しの島ということで，奄美ミュージアムの基本にしようというふうに構想をたてておりますので，それに乗っかって，滞在型も含めて観光協会などとどう連携するかということを今模索し始めているということです。来年度はそれが実際に動き出しますので，私たちの構想としては和泊町と知名町含めて，観光業界，タクシー会社，あるいは行政民間，そういったものをひとつにひっくるめた観光組織を考えてみたいものです。先ほどありましたように，発信をどうするかという課題に対処しながら，行政なり組合と一緒になって進めていく。そういう時代が来てるんだということが最近の動きでございます。

ですから，島ごと博物館，ミュージアム構想というのは沖永良部は沖永良部の売れる商品を，あるいは売れる観光をどうもっていくかという計画から実践に移す段階に来ているんだということです。先ほどありましたように，沖永良部の宝をもう一度自分たちで見つめなおして，自分たちも楽しみ，心を癒しながら外のほうに向けて発信していく，そういうことができる組織体を立ち上げる必要があります。今鹿児島県もようやく奄美にこの広域行政を使って意志形成機構を作ろうとしている試みが始まっております。以上でございます。

矢田　感心して聞いておりましたが，裏話をひとつ。５全総を作るときに，国土軸という概念がでてまいりました。これは大抵の人が早く高速道路を作れと，橋を作れと主張した。しかしそんな時代じゃないんじゃないのということで，かなり反論したんです。結果的にどういうわけか，和歌山から高松，松山，大分，鹿児島を通って南西諸島に太い線で国土軸を作った。これは一体何だ，ここで高速道路はできない。結局はやっぱり文化・生態系というものをきちっと掘り起こして，黒潮文化というものを掘り起こすところに相当支援する，というのが国土軸ではないかという話をしていました。

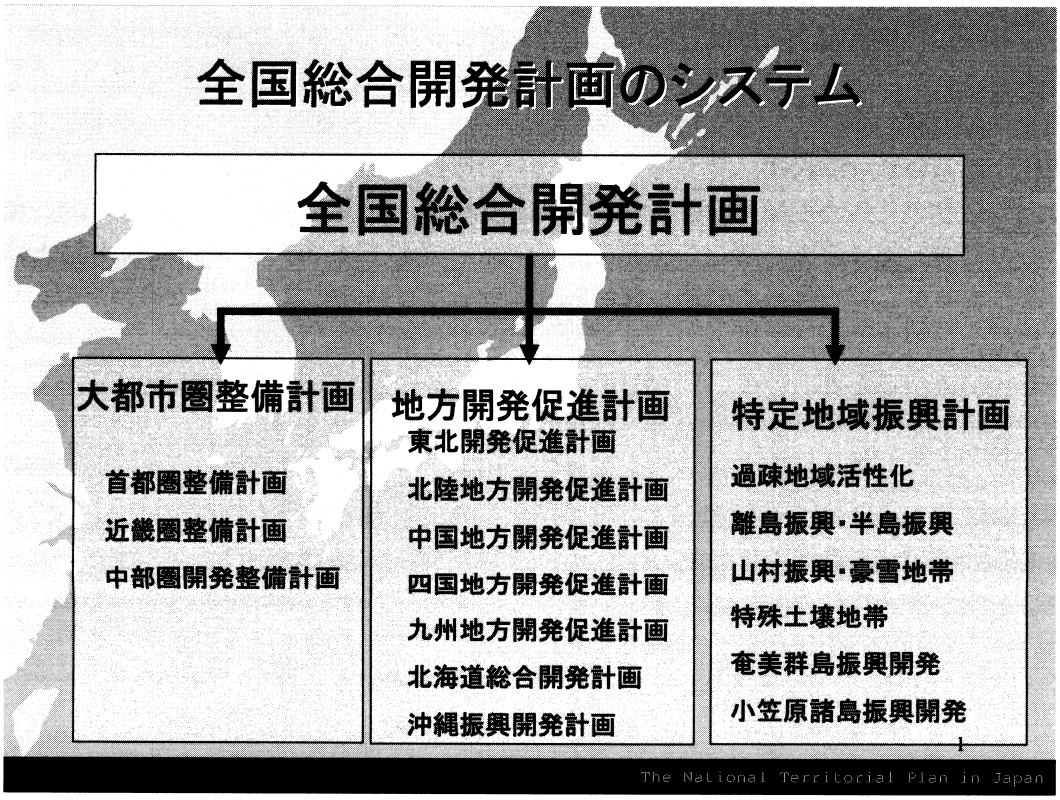
ところがなかなかこういうことを発信しても，地元から反応がなかった。おそらく今の話は５全総における西南国土軸の最大の目玉だというふうなかたちでいけばいいと思います。南西諸島特有なプロジェクトしていく。おそらくこの鹿児島大学でしていることも国土軸の，研究国土軸というものの一環だと思っております。ソフトな国土軸を作っていったらハードな国土軸と違った面白いものができると思うので，そういうストーリーでどんどん進めていくのに大賛成であります。

山田　予定の時間がまいりました。パネリストの先生方に共通の接点が見つからないものですから，シンポジウムが始まる前には話の展開が見えず，何日も悩んでおりました。終わってみますと，お三方がそれぞれの専門分野からアプローチしていただくことで，実に内容豊かなシンポジウムになりました。

矢田先生からは，地域政策の今日的な作られ方と，奄美の関係。菅沼先生からは，特産

品づくりに際して，どんな技術の利用が面白いかという具体的な提案。山門先生からは，新たな産業活動やコミュニティビジネスを育てようとする際に，地域の個性を，客観的に観察できる洞察力。これらの３つの側面を重ね合わせると，「奄美の自立と産業戦略」にとって必要な三条件が揃う。こういう関係が見えてきます。無能な司会者からすれば，事前には予想だにできなかった充実したシンポジウムになったと思います。この素晴らしい成果は，ひとえにパネリストの各先生が用意周到な準備をしてくださったおかげであります。会場の皆さんが，ここでのお話をヒントに，新しい視点で自分たちの活動を充実させてくだされば，沖永良部のさらなる発展につながるのではないでしょうか。

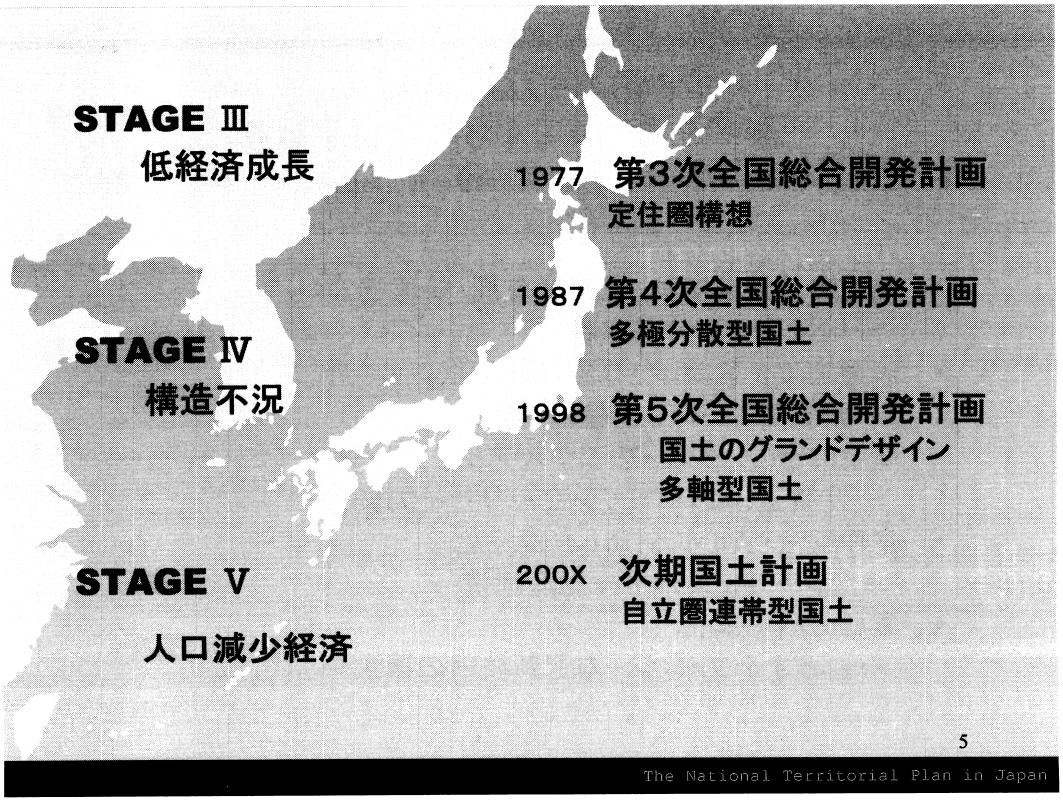
最後に，会場の皆さんからパネリストの方々に御礼の拍手をいただき，シンポジウムを閉じさせていただきたいと思います(拍手)。



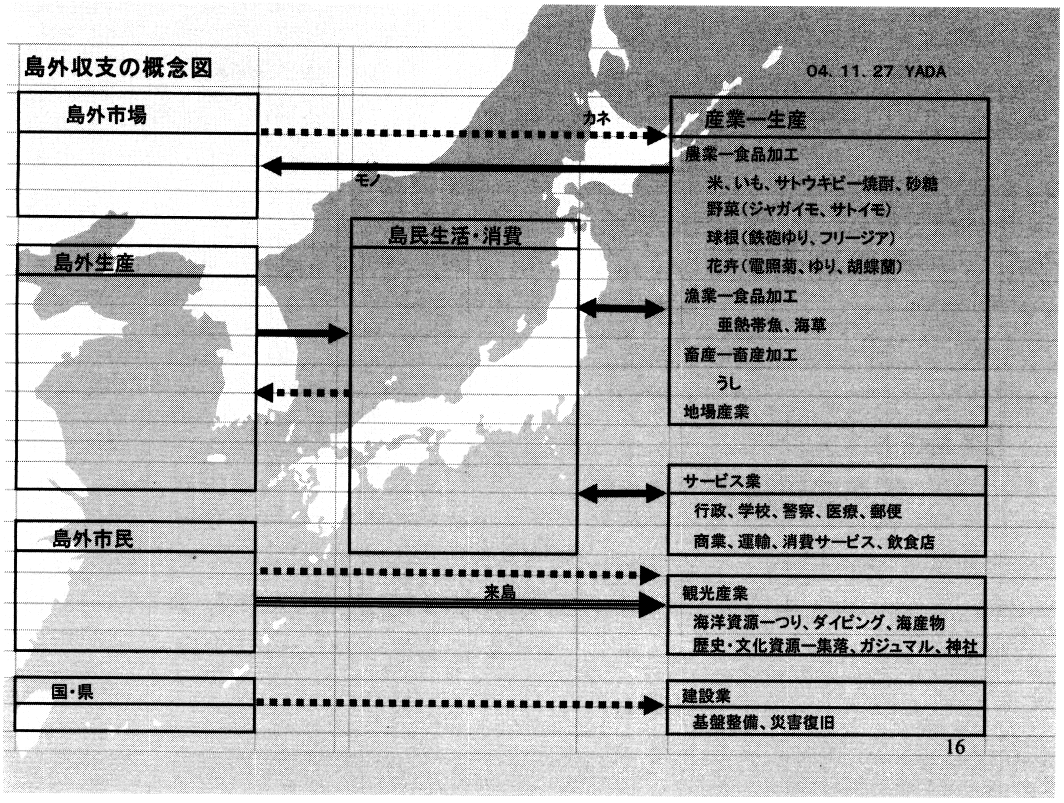
【図表１－矢田】

全国総合開発計画の展開
STAGE 1
戦後経済復興
1951
特定地域総合開発計画
河川総合開発
1962
全国総合開発計画
新産業都市建設
STAGE 2
高度経済成長
1969
第2次全国総合開発計画
全国交通・通信ネットワークの形成
4
The National Territorial Plan in Japan

【図表２－矢田】


STAGE Ⅲ
低経済成長
1977 第3次全国総合開発計画
定住圏構想
1987 第4次全国総合開発計画
多極分散型国土
STAGE Ⅳ
構造不況
1998 第5次全国総合開発計画
国土のグランドデザイン
多軸型国土
STAGE Ⅴ
200X 次期国土計画
自立圏連帯型国土
人口減少経済
5
The National Territorial Plan in Japan

【図表２－矢田】



【図表３－矢田】

奄美の自立に向けて
―農業生産・加工からみた産業戦略

2004. 11. 27　　鹿児島大学農学部生物資源化学科　教授　菅沼俊彦

- 地域の特性を生かした農業生産・特産物づくり
  ―地域ブランド、在来種―
- 流通加工を意識した作物品種選択
  ―消費者ニーズ、新品種導入―
- 環境に優しい生産・加工システム
  ―持続型、ゼロエミッション、リサイクル―
- 食の安全・安心に対応した商品化
  ―トレーサビリティー、地産地消―
- 素材の高機能化
  ―バイオテクノロジーなど新技術の導入―

【図１－菅沼】

大島地区の農業産出額（平成14年）

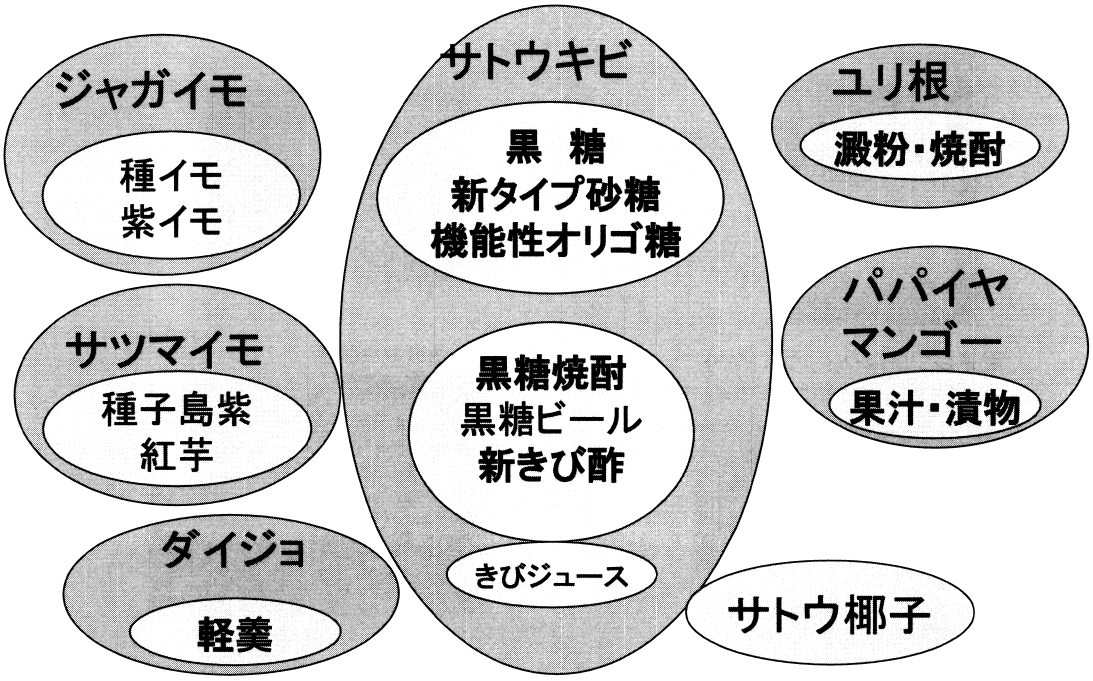
単位 1,000万円

•	計	1位		2位		3位	
•	品目	金額	品目	金額	品目	金額	
•大島地区	2496	さとうきび	722	肉用牛	389	ばれいしょ	314
•名瀬市	43	観葉植物	7	タンカン	3	パッションフルーツ	3
•大和村	16	すもも	6	やまのいも	1	かんしょ	1
•宇検村	18	鶏卵	χ	バナナ	1	タンカン	1
•瀬戸内町	42	豚	8	肉用牛	8	パッションフルツ	3
•住用村	11	ポンカン	2	タンカン	2	パッションフルツ	1
•龍郷町	30	さとうきび	6	肉用牛	3	バナナ	3
•笠利町	99	さとうきび	45	鶏卵	χ	肉用牛	9
•喜界町	213	さとうきび	130	肉用牛	31	きく	17
•徳之島町	249	さとうきび	116	肉用牛	45	ばれいしょ	40
•天城町	280	さとうきび	142	肉用牛	60	ばれいしょ	47
•伊仙町	309	さとうきび	124	ばれいしょ	85	肉用牛	68
•和泊町	590	きく	156	ゆり	86	肉用牛	59
•知名町	431	ばれいしょ	102	葉たばこ	79	さとうきび	53
•与論町	165	肉用牛	70	さとうきび	59	さといも	13

名瀬統計情報センター

【図２－菅沼】

農業生産・加工からみた産業戦略
―地域糖質資源の高度利用―



【図３－菅沼】

オンラインショップにおける砂糖類の販売価格等

（単位：kg 換算／円）

砂糖の種類	上白糖	グラニュー	三温糖	白ザラ	中ザラ	黒糖	角砂糖
取扱店数	5	6	8	3	4	19	7
平均価格	183	280	326	617	479	940	1,042
高値	220	571	525	857	840	2,400	1,833
安値	148	185	198	260	225	500	300
ナショナルブランドの占有率(%)	100	67	63	67	50	0	29

砂糖の種類	オーガニク	粉砂糖	ブラウン	スティク	コーヒー	てん菜含みつ糖
取扱店数	4	3	16	2	2	4
平均価格	1,119	659	486	1,544	835	712
高値	1,800	900	800	1,700	1,000	1,320
安値	450	526	184	1,388	670	400
ナショナルブランドの占有率(%)	—	67	50	50	50	25

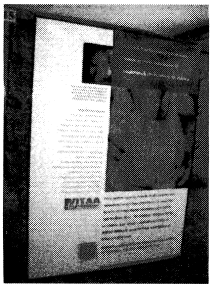
その他

赤砂糖1店舗1,300円、粗糖1店舗937円、氷砂糖1店舗314円、果糖1店舗700円である。

【図４－菅沼】

サツマイモ新品種と移出処理

カロチン含有サツマイモ



アリモドキゾウムシ

電子レンジ用クイックスイート

蒸煮殺虫装置

【図５－菅沼】